

# VRによる地域医療および地域包括ケアシステム

松浦 康之

プリンスオブソンクラ大学人文社会学部東洋言語学科

181 Chareonpradit Road T. Rusamilae A.Muang Pattani 94000 Thailand

yasuyuki.m@psu.ac.th

## Community Medicine and Integrated Community Care System using Virtual Reality

Yasuyuki MATSUURA

Department of Eastern Languages, Faculty of Humanities and Social Sciences,

Prince of Songkla University, Pattani

181 Chareonpradit Road T. Rusamilae A.Muang Pattani 94000 Thailand

### 1. 背景

医学の進歩により、平均寿命は年々延びている。2050年には、日本人女性の平均寿命は90歳を超えると予測されている。2050年、人口の約4割が高齢者と予測されており、高齢者主体の社会を考える必要がある。

しかし、平均寿命が延びる半面、健康寿命とのギャップの拡大が問題になっている。QOLの問題、人材不足、財政問題なども含め、この平均寿命と健康寿命のギャップの拡大をいかに小さくするかが今後の焦点となってくるため、これからの医療においては、メンテナンス医療、予防医療が重要となってくる。その中で、高齢者にとって、ARやVRを用いるなどして、姿勢よく歩くことは疾病予防・健康維持に非常に有用かつ重要である。

反面、効果的な歩行運動をするための機器の開発や評価手法の開発はあまり進んでいないのが現状である。また、各種機器の技術開発によって、簡便に生体情報を計測できるようになった。しかし、これらの機器によって得られた心拍数などの連続データは、医療機器を用いて測定した各種生体データとは様相が異なるため、様々な試みが進められている。さらに、これらのビッグデータを統括的に処理する方法は確立していないため、数学的手法による解決が望まれている。

### 2. 健康管理の現状と今後の展望

日本では、医師不足や地域医療格差が深刻化している。今後、厚生労働省は、地域医療・在宅医療の重点化データを活用した予防・健康づくりを進める方針を示している。この中で、ARやVRを用いた健康管理や状態変化を捉えることは、生体の継時的な健康状態を知るだけでなく、心身の健康維持や治療手法の開発、医療従事者の負担軽減、地域医療・在宅医療の拡充、医療費削減につながる。

医学の進歩のみならず、科学の進歩に伴い、様々な知見や科学的根拠が日々生み出されている。これらの情報をアプリに導入し、健康管理のために利用者自身が出来ることについて、より多くの選択肢と情報を提供することが有用であると考え。また、基礎データの蓄積とフィードバックを行い、信頼性の高い診断モデルを作成することで、今後の可能性が拡大すると考える。